

法華經の成立と伝弘

はじめに

仏教の教えは、たいへんむずかしいもののように思われています。その大きな原因のひとつは、仏教の經典がいかにもとつきにくい外見をしているからだだと思います。それも無理はありません。二千年近くも前に、インドのことばで書かれたものが、むかしの中国のことばである漢文に訳され、それがそのまま日本に伝わって現代におよんでいるからです。

仏教の經典のうちで最もすぐれたものが「妙法蓮華經（法華經）」であることは、もはや動かすことのできない定説になっていますが、いまわたしどもの手もとにあるかなまじりのものでも、むずかしい漢字が多く、たいへんいかめしい感じですが、その解説書にしても、おおむね原典そのままのわけを書いてあるにすぎません。そして「法華經」には、幻の世界のような場面があったり、おとぎ話のような物語があったり、かと思うと非常に含みの多い哲学的なことばが出てきたりして、なんだか現実の生活から離れた、不思議な、神秘的な教えのような気がします。それで、たいていの人々が「とても『法華經』は深遠でわからない」とさじを投げたり、「いまの世には通用しない夢のようなものだ」と、あたまから問題にしなかつたりするのです。

「法華經」はわかりやすい教え

けれども、釈尊がお説きになった当時は、そんなわかりにくいもの

ではなかったのです。釈尊は、神がかりになって一般の人に理解できないような神秘的なことをいいたされたものでもなければ、ひとりよがりの考えを押しつけられたものでもありません。釈尊は、「この世界とはどんなものか。人間とはどんなものか。だから、人間はこの世にどう生きべきであるか。人間どうしの社会はどうあらねばならないか」ということなどについて、長い間考えて考えぬき、そして「いつでも」「どこでも」「だれにも」当てはまる「普遍の真理」に達せられたのです。「いつでも、どこでも、だれにも当てはまること」が、そうむずかしいものであるはずはありません。たとえば、「一を三つに分けたものは三分の一である」ということのように、だれにも理解できることなのです。「これを拝めばかならず病気が治る」というような、理性ではわからない、ただ信ずるほかはない教えとは、まるっきりちがうのです。

ところが、「一を三つに分けたものは三分の一である」というようなことでも、わかるときがこないとほんとうにはわからないものです。立教大学の教授で、有名な数学者である吉田洋一氏が、こんな思ひ出話を書いておられます。小学校三年生か四年生で小数をならって、 $1 \div 3 = 0.3333\dots$ といつまでも割り切れない計算にぶつかった。しかし、実際に紙を三つに折ってみるとキッチリ三つに折れる。さあ、わからない。りくつでは割り切れないのに、実際は割り切れる。さすがに後日数学者になる人だけあって、真剣に「不思議だなあ」と考えていた。すると、五年生か六年生になって、分数というものをならった。「三分の一」という新しいものの見かた

を教わった。これが1を3で割った答だときかされて、はじめはなんだかバカにされたような気がした。しかし、その分数というのがたいへん気に入って、「三分の一」というものをひとつの数として考えようと、とても努力した。おかげで、実際に紙を三つに折ることができるのはちっとも不思議ではないことがわかった ということです。

仏法も、ちょうどこのようなものです。もともとだれにも必ずわかるはずのものだが、あるところへ達するまでは、ほんのひと息というところでわからない。数学でも、初めから分数のような進んだ考えを教えたらよさそうなものだけれども、まだ小学一年生や二年生に一足飛びにそれを教えてもかえってわからないから、まず一とか二とかいう整数から始め、次に小数を教える。あるいは、三分の一という頭のうえだけの「考え」を教えないで、まず紙を三つに折ってこれが三分の一だよという「実際」を教える。釈尊が当時の人びとを教えられたのも、ちょうどそのように、相手の理解力に応じ、理解の程度に応じて、いろいろさまざまな説きかたをされたのです。たとえ話をされたり、因縁話をされたりしたのです。それで、当時の人びとにはよくわかったのです。「法華經」の文章に現われている表面だけを見て、「実際にはありそうにもない幻のような世界が説かれている、とても信じられない」などと考えるのは、じつに浅い読みかたであって、その精神を読めば、非常に近代的な、科学的な、人間的な真理に満ちているのに驚かざるをえないでしょう。

重ねて申しますが、釈尊の教えは当時の人びとにはとてもよくの

みこめたのです。よくのみこめたから、^{とうじ} ^{ひと} ^{じんせい} 当時の人びとの人生をすばらしいものに^{いっぺん} 一変させたのです。そうでなければ、^{ごじゅうねん} ^{みじか} 五十年の短いあいだに、あれだけ^{おほ} ^{ひと} ^{こころ} ^{きえ} 多くの人びとが心から^お 帰依するはずがありません。しかも、^{しゃくそん} ^{きょうだん} 釈尊の教団は、「きたる者は拒まず、去る者は追わず」というきわめて^{じゆう} 自由なものだったといえます。「^{ほけきょう} 法華經」の「^{ほうべんぼんだい} 方便品第二」にてでくる「^{ごせんきこ} 五千起去」もその例で、^{れい} ^{ごせんじん} ^{でし} ^{いちじ} ^{ほうざ} 五千人もの弟子が一時に法座から^た ^さ 立ち去っていても、^{しゃくそん} 釈尊はそれをお止めに^と ならなかったのです。こうして、^{むり} ^ひ 無理に引っぱっていくことも、^お 押しとどめることも^{いっさい} 一切されなかったにもかかわらず、^{きえしや} ^{かず} ^{なんまん} みるみるうちに^{なんじゅうまん} 帰依者の数が何万何十万となっていたことは、^{しゃくそん} ^{ひと} 釈尊その人の^な ^{おし} ならぶものもない^{かんかりよく} ^{せつとくりよく} 感化力や説得力にもよったことはもちろんですが、^{なに} ^{おし} 何よりも^{とうと} 教えそのものが^{わか} 尊く、そしてだれにもよく^な 解ったからにほかなりません。

ところが、^{しゃくそん} ^{てってい} ^{じゆうしゆぎ} 釈尊のこの徹底した自由主義は、その^{にゅうめつご} ^{いちじ} 入滅後に一時ちよっとこまった^{じょうたい} 状態をひきおこしました。というのは、^{にゅうめつ} 入滅される^{ゆいごん} ときの^{げんしやう} ^{うつ} ^か 遺言も、ただ「すべての現象は^{おこた} ^{つと} 移り変わるものだ。怠らず^{ひとこと} 努めるがよい」という一言だけで、^{しゃくそん} ^{きょうだん} だれがどんなふう^{ひとこと} に教団をまとめていけよというようなことは、一言もおっしゃらなかったのです。^{のこ} 残された^{でし} 弟子たちは、^{ちく} ^{しぜん} 地区ごとに自然なまとまりをもって、^{しゃくそん} ^{おし} 釈尊の教えを守っていました。しかし、^{きやうぎ} ^{とうせい} 教義の統制ということがなかったために、^{ひろ} 広いインドのそれぞれの^{ちく} 地区で、あるいはそれぞれの^{おし} ^{たい} ^{かいしゃく} グループで、教えに対する^お 解釈がすこしずつちがっていたのです。

そのちがいを大づかみにいえば、^{しゃくそん} ^{みずか} ^で 釈尊が自らよくお出かけになつて^{せっぽう} 説法なされたところでは、^{ほう} ^{かいしゃく} ^{ただ} ^{つた} 法の解釈も正しく伝えられていました

が、釈尊しゃくそんから直接ちよくせつに説法せっぽうをきかず教えおしだけが伝わつたっていったような場所ばしょでは、伝える人つたひとの考えかんがかたが加わくわって、かなりちがった形式けいしきで伝えられたようです。これは、場所ばしょや人ひとの問題もんだいだけでなく、時間じかん的にもそういうことがいえるので、釈尊しゃくそんご在世ざいせいちゆう中や入滅にゆうめつ後しばらくのあいだは血ちのかよった生いきた教えおしだったのが、だんだん年月ねんげつがたつうちに、ほんとうの精神せいしんが失うしなわれて、形かたちだけしか伝えつたられないという結果けっかになったのは、ご存ぞんじのとおりです。

さきに「一時いちじちょっとこまった状態じょうたいをひきおこした」と書いた「一時いちじ」というのは、けっして百年ひゃくねんや二百年ひゃくねんのことだけではなく、二千数百年せんすうひゃくねんたった今日こんにちまでのことをもいっただけです。永遠えいえんの生命せいめい（仏ほとけの無量寿むりょうじゆ）ということから考えれば、二千数百年せんすうひゃくねんなどほんの「一時いちじ」なのです。中国ちゆうごくから日本にほんへ伝わつたった仏教ぶつぎょうは、高僧こうそう・名僧めいそうの出るごとに、一時いちじは潮しほが満みちてくるように生きいきした力ちからをもったこともありましたが、その潮しほもしばらくのうちにスーッと引ひいていってしまうのでした。日蓮聖人にちれんしょうにんは、日本にほんの仏教ぶつぎょうに生命せいめいを吹きこまれた最ももすぐれたお方もつとであると信しんじていますが、その入寂にゆうじやく後年月ねんげつがたつうちに、やはりその教えおしもゆがめられたり、形かたちだけのものになってしまったのです。

さて、釈尊しゃくそんが入滅にゆうめつされたすぐあとのインドでも、前まえにも述べましたように、場所ばしょにより、弟子でしたちのグループによって、教えおしの解釈かいしゃくがちがってきました。ことに出家しゅっけの人ひとびとは、在家ざいけの人ひとびとのできないようなことを行おこなったり、説といたりして、出家しゅっけの権威けんいをつくろうとしました。ご在世ざいせいちゆう中は、「法華經ほけきょう」の中なかにも毎度まいどでできますよう

に、比丘(男の出家)、比丘尼(女の出家)、優婆塞(男の在家修行者)、
優婆夷(女の在家修行者)たちがみんないっしょに説法をきき、修行
し、なかよく法の弘通につとめたのですが、いつのまにか出家と在家
とのあいだにみぞができてきました。

どんなみぞができたかといえば、出家の一部の人びとは、「なぜ
戒律(仏教者の生活の戒め)を守らなければならないか」という根本
精神よりも、ただ「戒律を守ること」だけを重んずるようになりま
した。すなわち形式主義です。

また、もともと生きた人間のための、人間生活のための教えであ
ったのを、当時インドにあったほかの教えや学問に対抗するために、
わざわざひどくむずかしい哲学につくりあげてしまった出家たちも
あります。

また一方では、「とても釈尊のいわれるようにすべての人びとを仏
の境地まで導くことはできない。われわれも、とうてい仏のような
えらい人にはなれない。ただ、自分がこの世の苦しみや悩みから解脱
すればいいのだ」という、利己的な考えに落ちこんだ人たちもあり
ます。

こうしてゆがめられ、生き生きした力を失ってゆく仏法を見て、
「このままにしておいてはいけない、どうしても釈尊のほんとうの
お心にかえさねばならぬ」という熱烈な願いが、主として在家信者の
あいだに起こってきました。そうしてできた新興グループが、大乘
仏教の教団なのです。大乘というのは、「よい乗りもの」という意味
で、仏の世界に達するためのよい乗りものであるというわけです。

そして、いままでの古い教団の考えかたを「小乗」(粗末な乗りもの)といつて軽蔑しましたので、古い教団でも負けてはいず、「おまえたちのいうのはほんとうの仏教ではない」とやり返し、両方ははげしく対立しました。

一仏乗の教え

そのとき、「いや、仏の教えに大乘も小乗もない。ただ一乗しかないのだ。みんな仲間どうしのけんかはやめて、この一乗に従おうではないか。釈尊が『これこそ、いちばんすぐれたものだ』といつてお説きになった最高の教え、真実の教えは、この法門だったのだよ」といって書きあらわされたのが、ほかならぬ「法華經」だったのです。

それは仏滅後七百年ぐらいたった頃のことだといわれていますが、わたしは、その七百年間における仏教の移り変わりが、現在にいたる二千数百年の移り変わりと同じく、いわばひな型のようなものだということに、大きな意味を感じるのです。仏教が形だけの、そして現在生きている人間を救う力のない仏教になってしまった二十世紀に、ほんとうの釈尊の教えにかえろうという運動が、在家の皈依者のあいだから起こり、在家の人びとを中心として日本じゅうにひろがろうとしている事実は、まことにおろそかに考えてはならぬ深い深い仏意によるものだと思ひます。

これからの仏教は世界の宗教

日本国じゅうだけではありません。仏の教えを新しく見直そうとい

う動きは、いまや世界全体に潮のように起こっています。欧米の
進歩的な人びとには、一神教にも、無神論にも、唯物主義にもあき
たらず、最後に仏教に解決を求めようとする人が少なくありません。
共産主義国である中華人民共和国でさえも、新しい倫理（人間のふ
み行なうべき道）の原理として、仏教の教えをとりあげているとき
いています。

ほんとうに、いまこそ大切なときです。いまのうちに地球上の人間
が仏の教えにたちかえって、「人間の尊厳」ということをしっかりと
考え、「自分と他人をともに生かす」という生きかたにもどらないか
ぎり、人類はいっぺんに滅びてしまうことにもなりかねないのです。

このときにあたって、わたしがいちばん残念に思うのは、仏の最高
の教えのこめられた「法華經」の見かけが、いかにもむずかしそう
であることです。そして限られた人たちだけの研究物が、宗教専門家
たちの占有物のようになっていることです。そのために、日本中の人
びと、いな地球上全体の人びとにほんとうに親しまれず、理解され
ず、したがって人びとの生活の中へ浸みとおってゆきにくいという
ことです。

わたしがこの本を書こうと考えた趣意の第一は、ここにあるので
す。あくまでも「法華經」の元の形は尊重しますけれども、何より
も大切なその精神が、現代の人びとに理解され、共感されるように
ということの本意として、解説してみようと考えたわけです。

「法華經」は、一部分だけ読んだのでは理解されるものではありません。「法華經」は、深い教えであると同時に、すばらしい芸術作品

であるともいわれておりますとおり、お經の全体がひとつの劇のよう
にあらわされています。だから、初めから終わりまで読みとおさ
なければ、ほんとうの意味をつかむことはできません。ところが、
あのむずかしいことばの多いお經を初めから終わりまで読みとおし
て、その意味をつかむのは、容易なことではないのです。どうして
も、現代人の頭で理解できるような解説が必要なのです。わたしが
この本を書こうとした第二の趣意はここにあるのです。

しかし、高度の芸術作品であるだけに、あくまでも元の形は尊重し
なければなりません。また、芸術作品であるだけに、その經典（か
なまじり訳でもよい）には、わたしたちの魂に浸みこんでくるよう
な、なんともいえぬ力強さがあります。それで、この本を読まれる
ときに、經典を参照しながら読まれると、なおいっそうよく理解で
きることと思います。その参考のために、平樂寺書店版の『訓訳
法華經並開結』の何頁何行目にあるかということ、傍注によって
示しておきました。もちろん、それは、特別に深く研究しようと思
う人のためであって、「法華經」の精神はこの本だけでも十分会得でき
るはずで。

そうして、この本によって「法華經」全体の精神を理解したうえ
で、要所要所を經典によって朝夕読誦されるならば、その精神はま
すます強く心の底に植えつけられ、それはかならず日常生活の行な
いのうえに現われ、そしてあなたの前には新しい人生が開けてくる
でしょう。それを念じ、それを信じて、この本を書く次第であります。

法華經の成立と伝弘

「法華經」がどうして生まれたものであるかについては、前にあ
まし書きましたが、もうすこし詳しく、そしてそれが日本に伝わる
までの成りゆきをも、述べてみましょう。

釈尊ご在世のころのインドには、まだ文字は一般には普及してい
ませんでした。それで、釈尊の説法は、耳で覚えて口づてに伝えら
れました。ものを聞いたら頭に覚えるよりしかたがなかったころの
人たちは、今ではちょっと想像できないほど記憶力がたしかでした。
また、その頃は、生活も今日のように複雑なセカセカしたものでは
なかったし、しかも、頭がよくて心の澄みきった大弟子たちが、師と
仰ぐ釈尊の一語一語をかみしめるように聞いていたのですから、ま
ず聞きまちがいはなかったことと思われます。そのうえ、仏弟子た
ちは、釈尊が入滅されたのち、自分たちの記憶にまちがいはないか
と、なんども大会議を開いて、それをたしかめたり、訂正しあつた
りして、ひとつにまとめました。ですから、耳で聞き、口で伝えた
にしても、釈尊のおっしゃったことは正しく残されていったわけ
です。

とはいえ、広い北インドの土地を五十年間も、足の裏の土踏まず
が板のようになるまで歩きまわって説かれた、数知れないほどの
説法ですし、前にも述べましたように、その人その人の理解力に応じ
ていろいろな説きかたをされましたので、地区により、グループに
よって、受け取りかたがちがってきましたし、時代の移り変わりに
よって、解釈のしかたや、行ないのうえに表現するやりかたがちが
ってきたことは、やむをえません。

しかし、釈尊しゃくそんの教えおしそのものは、前まえに述べたような仏弟子ぶつでしたちの努力どりよくによって、正しくただ伝えつたられました。ですから、どのお経きょうだって尊とうとくないものはありません。「阿含經あごんきょう」にしても、「般若經はんによきょう」にしても、「阿彌陀經あみだきょう」にしても、その他のお経きょうにしても、それぞれに尊とうとい教えおしが説とかれています。ただ「法華經ほけきょう」には、そういう釈尊しゃくそんご一代いちだいのすべての教えの根本精神こんぽんせいしんがはじめてはっきりと発表はつぴょうされ、またすべての教えの精神せいしんがよくかみくだかれて、ここに統一とういつされているのです。いいかえますと、釈尊しゃくそんが「これこそわたしの教えの神髓しんずいであるぞ」とおっしゃったその神髓しんずいが、わかりやすい、そして感動かんどうに満ちた表現ひょうげんであますところなく述べられているのです。

よく、あるお経きょうとあるお経きょうとの優劣ゆうれつを論じたり、それを釈尊しゃくそんの教えの優劣ゆうれつのように錯覚さくかくしたりする人ひとがありますが、それはとんでもないまちがいです。どの經典きょうでんも、釈尊しゃくそんご自身じしんが編集へんしゅうされたものではありません。釈尊しゃくそんは、鹿野苑ろくやおんで五人ごにんの修行者しゆぎょうしやに最初の説法さいしよをなさってから八十歳はちじゅうさいで入滅にゅうめつされるまでの五十年間ごじゅうねんかんに、数知れぬ人かずしたちひとにむかって、数知れぬほどの説法せっぽうをされただけなのです。その数知れぬほどの説法せっぽうのうち、それぞれのグループの弟子・孫弟子でしたちが、自分じぶんたちが聞いた、あるいは聞き伝えた説法せっぽうを、思い思いに本ほんにまとめたのが、いろいろな經典きょうでんなのです。釈尊しゃくそんご自身じしんは、どのお経きょうを通じて仰あおいでも、同じ光ひかりでわれわれを照らしてくださる尊とうといお方かたであることに変わりはないのです。ですから、「法華經ほけきょう」が最高さいこうの教えおしであることにはまちがないのですけれど、それを讃たたえるためにほかの經典きょうでんをけなしたりするのは、心得こころえちがいといわなければなりません。

象徴的な表現

さて、その「法華經」は、当時の大衆によく理解できるように、戯曲のような形で編集されました。また、形のない、あたまのうえだけの考えというものは、そういうような学問をした人でなければのみこみにくいものですから、「法華經」の編集者は、形のない思想をあつらひに現わして、のみこませようと努力しました。

たとえば、お釈迦さまの眉間から光が出て東方一万八千の世界をハッキリと照らしだすと、どこにも仏や仏の弟子たちがおられるのが見えたことが「序品第一」にあります。それはつまり、この地球上ばかりでなく、どの星にも、どの天体にも、すなわち、宇宙全体どこにでも仏はいらっしゃるのだということ、こういう表現でいいあらわしたのであります。

地が震動するのも、花の雨が降るのも、みなそうです。現代の文章にも「くやしくて、全身の血が逆流した」とか「おかしくて、笑いころげた」などという表現がよく使われています。だれしも、これを読んで、うそだとは思いません。ところが、よく考えてみると、いくらくやしくても、全身の血は逆流などしませんし、笑いころげたといつても、せいぜいおなかをかかえて、頭を畳へつけるかつけないくらいでしょう。しかし、「全身の血が逆流した」とか「笑いころげた」という表現は、「事実」ではなくても、書いた人の心持の「眞実」をよく伝えてくれます。

ここがこの「法華經」を理解するひとつの鍵なのです。大切なのは、「事実」でなく、「眞実」です。仏がわたしたちに教えてくだ

さろうとする「^{しんじつ}眞実」なのです。ですから、どんなに^{じっさい}実際にはあり
そうもないことが書いてあっても、その文字の、その^{ぶんしやう}文章の^{ひやうめん}表面を
つき^ぬ抜けた^{おく}奥にある「^{しんじつ}眞実」、^{ほとけ}仏が^{おし}教えてくださろうとする「^{しんじつ}眞実」
をこそ、しっかりとつかまねばならないのです。

鳩摩羅什の^{く まらじゅう}翻訳

その「^{ほけきやう}法華經」を^{ちゆうごく}中国に^{つた}伝え、^{ちゆうごくご}中国語に^{やく}訳した人はいろいろありま
すが、^{げんざいもち}現在用いられているのは鳩摩羅什という^{ひと}人の手になったもの
です。この^{ひと}人のお父さんはもと^{とう}インドの^{めいもん}名門の出ですが、^でインドと
^{ちゆうごく}中国の^{あいだ}あいだにある^{きじ}龜茲という^{くに}国に行き、^{こくおう}この^{いもうと}国王の^{けっこん}妹と結婚し
ました。そして^う生まれたのが鳩摩羅什です。この^{くに}国もたいへん^{ぶつきやう}仏教の
^{さか}盛んな^{くに}国で、鳩摩羅什も七歳のときお母さんと共に^{かあ}出家し、^{とも}インド
に^{りゆうがく}留学して^{だいじやうぶつきやう}大乘^{まな}仏教を^{まな}学びました。その^{さいのう}才能・^{じんかく}人格が^{ばんにん}万人にすぐれ
ていることを見^み極めた^し師の^{すりや}須梨^{そま}耶蘇^{らじゅう}摩は、^{きこく}羅什が^{きこく}帰国するとき、
「^{みやうほうれんげきやう}妙法蓮華經」を^{さず}授け、その^{あたま}頭をなでながら、「^{ぶつにちにし}仏日西に入りて、^{いよう}遺耀
まさに^{ひがし}東におよばんとす。この^{きやうでん}經典は^{とうほく}東北に^{えん}縁あり。なんじ^{つつし}慎んで
伝弘せよ。」と、いわれたとあります。「^{とうほく}東北に^{えん}縁あり」ということ
ばは、いまから^{いみぶが}ふりかえってみると、たいそう^{いみぶが}意味深いものであつ
て、^{ごじつ}後日、さらに^{とうほく}東北にある^{にほん}日本において^{いのち}ほんとうにその^{はな}生命の花が
^{ひら}開いた^{じじつ}事實に、^{むりやう}無量の^{かん}感を^{おぼ}覚えざるをえません。

さて、^{らじゅう}羅什は^し師のことばに^{したが}従って、^{とうほく}東北の^{ちゆうごく}ほうにある^{ちゆうごく}中国へいっ
てこの^{きやう}お經を^{いちだいけっしん}ひろめようという^{いちだいけっしん}一大決心をしましたが、そのころの
^{ちゆうごく}中国には^{せんらん}戦乱があいつぎ、^{くに}国が^{ほろ}滅びたり^{おこ}興ったりして、なかなか^{おも}思う

ようにいきませんでした。しかし、羅什らじゅうの名声めいせいはあまねくひびきわたっていただけで、ついに後秦ごしんという国くにができたとき、その国王こくおうの招きまねを受けて国都長安こくとちやうあんに行きました。そのときすでに六十二歳ろくじゅうにさいにおよんでおりましたが、その後八年間ごはちねんかん、七十歳ななじっさいでなくなるまで、国師こくしの待遇たいくうを受けながら、いろいろな経典きょうでんを中国語ちゅうごくごに訳やくしました。

なかんずく「法華經」が最も重要なものであったことはもちろんです。それまでの中国語訳ちゅうごくごやくには、誤りあやまがたくさんありましたので、羅什らじゅうは非常に慎重な態度ひじょう しんちょうで、しかも命いのちをかけた真剣しんけんさで、その仕事しごとにうちこみました。すなわち、羅什らじゅうはインド語ごも中国語ちゅうごくごも自由自在じゅうじざいだったのですけれども、自分一人じぶんひとりで訳述やくじゆつするようなことをせず、やはり両国語りやうごくごに通じた大ぜいおおの学者がくしゃを集め、国王こくおうや信徒しんとなども列席れっせきのもとに、「法華經」の講義こうぎをしました。学者がくしゃたちはその筆記ひっきをもとにして、それぞれ中国語ちゅうごくごの訳やくをつくり、それをもちよって研究けんきゅうに研究けんきゅうを重ね、嚴重げんじゅうな討議とうぎをして、ようやく定本ていほんをつくりあげたのです。それに従事じゅうじした人は、およそ二千にせんにん人にもおよんだといわれています。ですから、インドのことばから中国語ちゅうごくごに訳やくされても、釈尊しゃくそんの教えおしはほとんど誤りあやまなく伝えつたられていると断じてさしつかえないわけです。

それについて、こういう話はなしがあります。国王こくおうは、羅什らじゅうの人物じんぶつや才能さいのうに深く心服しんぷくしていただけで、どうしてもその子供こどもを残のこしたくてしかたがありません。それで、無理むりに羅什らじゅうに奥さんおくを持たせたのです。そういういきさつがありましたので、羅什らじゅうは入寂にゅうじやくするときに、「わたしはやむをえず戒律かいりつを破やぶって妻つまをもったが、わたしが口くちで述べたことだけは、けっして仏意ぶつゐにそむかなかったものと信しんじている。

もしそのとおりだったら、わたしのからだを火葬にしたとき、舌だけは焼けのこることだろう。」

と、いい残しました。すると、入寂後火葬にしたところ、はたして舌だけが青蓮華の上に輝かしい光を放っていた、と伝えられています。

その後、中国の仏教の中心となったのはこの「法華經」であり、それも、小釈迦といわれた天台大師があらゆる大乘小乗の經典をきわめつくした結果「仏陀の真意はここにあり」と断じて、「法華玄義」(十卷)、「法華文句」(十卷)、「摩訶止観」(十卷)のようなすばらしい解説書をあらわされてから、ますます広く全中国にひろがり、まもなく朝鮮半島をへてわが国へも伝わってきました。

「法華經」はわが国文明の基礎

羅什訳の「法華經」が難波(いまの大阪)に着いたのが五七七年で、それから三十八年後には、聖徳太子のお手によって日本最初の解説書「法華經義疏」がつくられています。この「法華經義疏」こそ、現存している日本の書物のうちでいちばん古い書物なのです。

聖徳太子は、「法華經」の思想にもとづいて有名な「十七条憲法」をつくれ、はじめて日本の「国の法」と「人間のふみ行なうべき法」をうちたてられました。このときから日本に「文明」が開けたといっても過言ではありません。わが日本の文明の夜明けが、ほかならぬ「法華經」の精神によってなされたという大事実を、われわれは忘れてはならないのです。そのとき以来、じつに千四百年、われわれ

胸には、われわれの血には、「法華經」の精神が脈々と流れつづけているのです。

その後、このお經の教えの弘通に力をいれられた方は伝教大師（最澄）承陽大師（道元）その他数々ありましたが、とくに立正大師日蓮聖人が、身命をなげうってこれに新しい生命を吹き込み、広宣流布につとめられた偉業は、いまさら申すまでもありません。

「法華經」は人間主義の教え

それから七百年の年月がたちました。かつて釈尊入滅後その教えが次第に生き生きした力を失ってゆき、七百年後に「法華經」が生まれたことによってもとの生命をとりもどしました。不思議なことには、聖徳太子以後七百年のあいだにも同じようなことが起こり、そこで日蓮聖人が世に出られたわけですが、またその後の七百年の年月のあいだに、「法華經」のほんとうの精神はいつしか忘れられ、ぬけがらだけになってしまったのです。ただうちわ太鼓をたたいて「南無妙法蓮華經」をくり返して唱えれば救われるとか、「おまんだら」を拝みさえすれば願いがかなうとか、たいへん低い考えかたにさえ落ちこんでしまいました。

「法華經」は、その内容が尊いのです。その精神が尊いのです。そして、その教えを実行することが尊いのです。その教えを理解し、信じ、実行することによって、普通の社会生活をいとなみながらも、いろいろな悩みや苦しみにとらわれない心境へ次第に近づいてゆく。人と人とがなかよくし、人のためにつくさねばいられないような

きもち 気持になってゆく。たとえいちじつ 一日のうちのすうじかん 数時間でもそういったきもち 気持
になってくれば、そのひと 人のけんこう 健康もかんきょう 環境もしぜん 自然に変わってくる。そ
れがほんとうのすく 救いなのです。せかい 世界じゅうのにんげん 人間みんなが、そんな
きもち 気持になり、みんながへいわ 平和に、しあわ 幸せにくらしてゆくようになる
それがほけきょう 法華經のきゅうきょく 窮極のりそう 理想であり、ねが 願いなのです。

まことに、ほけきょう 法華經はにんげんそんちょう 人間尊重のおし 教えであり、にんげんかんせい 人間完成
のおし 教えであり、じんるいへいわ 人類平和のおし 教えです。いちごん 一言にしていえば、にんげんしゅぎ 人間主義
(ヒューマニズム)の教えなのです。にちれんしょうにんにゆうめご 日蓮聖人入滅後まさにななひゃくねん 七百年、
いまこそわたしたちはこのおし 教えのしんずい 神髄にたちかえって、じぶんじしん 自分自身の
ため、かぞく 家族のため、ひと 人のため、よなか 世の中のために、せいかつ 生活をきず 築い
ていこうではありませんか。